

富岡の万葉集「真金吹く丹生」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑 歌 5	上総 1 首 下総 1 首 常陸 2 首 信濃 1 首	}	東海道 — 東山道
	相聞歌	遠江 2 首 駿河 5 首 伊豆 1 首 相模 1 2 首 武蔵 9 首 上総 2 首 下総 4 首 常陸 1 0 首 信濃 4 首 上野 2 2 首 下野 2 首 陸奥 3 首		
	譬喩歌	遠江 1 首 駿河 1 首 相模 3 首 上野 3 首 陸奥 1 首	}	東海道 東山道
9 0	9			
国名不明	雑 歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽 歌	1 7 首 1 1 2 首 5 首 5 首 1 首		
1 4 0				

合計 2 3 0 首

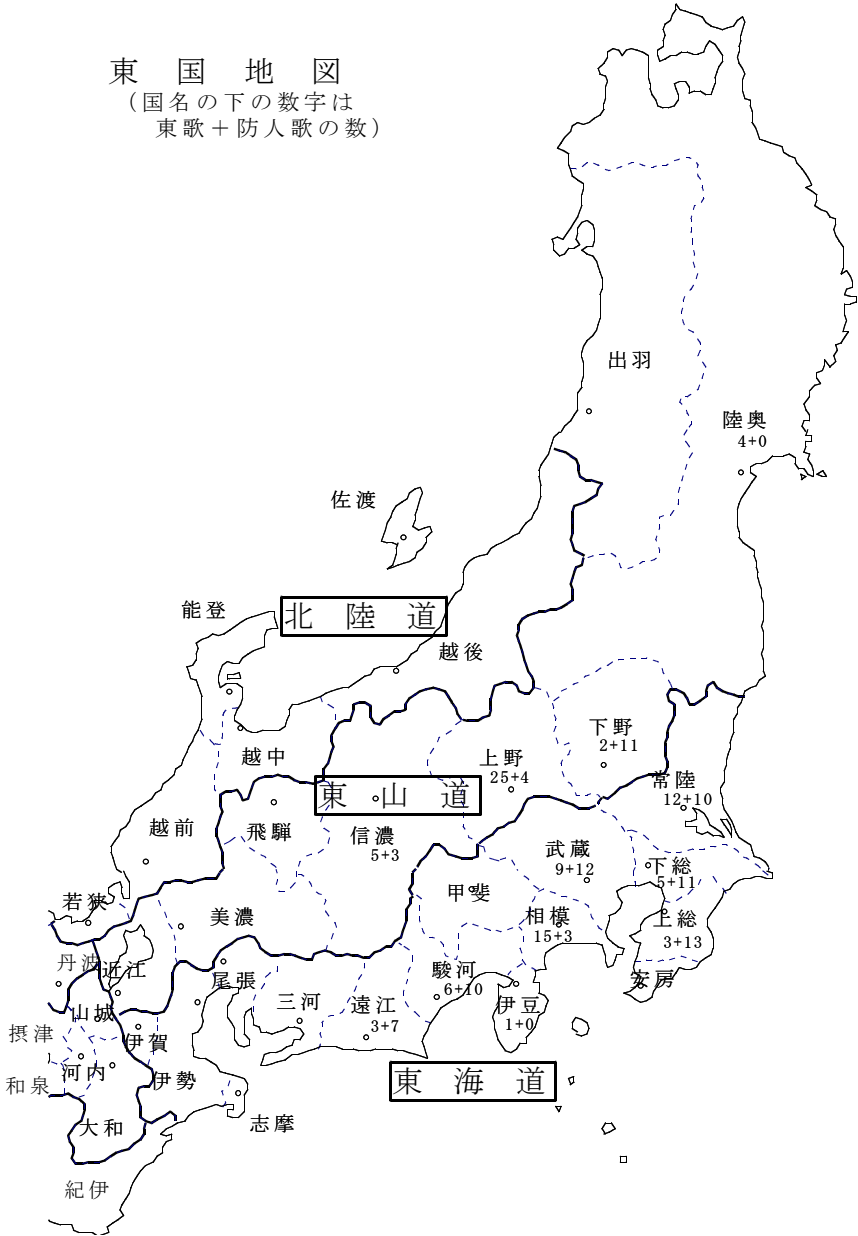
◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替り
て筑紫に遣はさるる諸国の防人
等の歌

遠江国	7 首	／	1 8 首
相模国	3 首	／	8 首
駿河国	1 0 首	／	2 0 首
上総国	1 3 首	／	1 9 首
常陸国	1 0 首	／	1 7 首
下野国	1 1 首	／	1 8 首
下総国	1 1 首	／	2 2 首
信濃国	3 首	／	1 2 首
上野国	4 首	／	1 2 首
武蔵国	1 2 首	／	2 0 首
	8 4 首	／	1 6 6 首

②昔年防人 … 8 首
合計 9 2 首

東 国 地 図
(国名の下に数字は
東歌+防人歌の数)



【丹生】

真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）

未勘国東歌

（丹生の赤土のようにには、はっきりと表に出して言わないだけで。私があなたに恋
しているということは。）

「真金」は鉄。「吹く」は金属を精錬すること。「丹」は赤土、また辰砂（水銀と
硫黄の化合物）。「丹生」は辰砂などを含む赤土を産する地の地名。「真金ふく」は「丹
生」や「吉備」にかかる枕詞。吉備は鉄の産地である。

「真朱」は、古代に用いられた朱色の顔料。赤土。辰砂。上二句は「色に出」を導
くための序詞。

「言はなく」「恋ふらく」の「く」は「ク語法」と呼ばれ、動詞・形容詞・助動詞
などを名詞化する用法。「くすること」という意味になる。上代には盛んに用いられ
たが、平安時代になると使われなくなり、今日では、「曰く」「恐らく」「老いらく（の
恋）」などに化石的に残るのみとなった。「言はなく」は「言はず」のク語法で、「言
わないこと」。「恋ふらく」は「恋ふ」のク語法で、「恋していること」。

◎ 古代における地名「丹生」

国名	木簡・和名抄	延喜式神名帳
大和		(宇智郡) 丹生川神社 (吉野郡) 丹生川上神社 (宇陀郡) 丹生神社
伊勢	飯高郡丹生郷	(飯高郡) 丹生神社 (飯高郡) 丹生中神社
近江	坂田郡下丹生里	(伊香郡) 丹生神社
上野	甘楽郡丹生郷	
若狭	小丹生郡 遠敷郡丹生郷	(遠敷郡) 丹生神社 (三方郡) 丹生神社
越前	丹生郡 丹生郡丹生郷	(敦賀郡) 丹生神社
越後		(古志郡) 小丹生神社
但馬		(美含郡) 丹生神社
紀伊		(伊都郡) 丹生都比女神社
土左	安藝郡丹生郷	
豊後	海部郡丹生郷	

このように多数の「丹生」地名が古代に存在したことが知られるが、これらの中で東歌の地域に所在するのは上野国甘楽郡丹生郷（現在の富岡市北西部）のみである。この歌は国名不明の部に収められてはいるが、上野国の歌である可能性が高いと考えられる。

万葉集卷十一に次のようなよく似た歌がある。

・白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（二七二五）

「白真砂」は「白い砂」で、「御津」に掛かる枕詞。「御津」は大阪湾にあった港で、「大伴の御津」「難波の御津」などとも呼ばれた。「埴」は黄赤色の粘土で埴輪などの材料。「埴生」は埴のある場所。

真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇）
白真砂御津の埴生の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（二七二五）

「丹生の真朱の」の歌と比べると、一句目と二句目とが異なるだけで、三句目以下は全く同じである。一句目・二句目も、「枕詞＋地名＋（黄）赤の土」という全く同じ構造をしている。偶然の一致とは思えないので、丹生の真朱の歌は、御津の埴生の歌（あるいはさらに別の類歌）を改作したものと考えられる。丹生の真朱の歌には東国方言が含まれていないので、この改作は東国に下ってきた都人の手によるものかもしれない。

《参考》

a 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ勝れ（三四一七）

b 淡海^{あふみ}の海沈^{しづ}着^づく白玉^{しらたま}知らずして恋せしよりは今こそ勝れ（二四四五）

c 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）
d 韓亭^{からとまりのこ}能許^{のこ}の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし（三六七〇）

【安蘇】

上毛野安蘇^{あそ}の真麻群^{まそむら}かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）

上野国東歌

（上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのだろうか。）

（別解 上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえて寝ても、満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのだろう。）

上毛野阿蘇山^{かみつけのあそやまつち}葛野^{かみつけの}を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ（三四三四）上野国東歌（上野国の阿蘇山の蔓草は、野が広いのを幸いに遠くまで這い延びてゆく。こんなに這い延びたものがどうして途中で絶えたりしようか。↓二人の仲もずっと続いできたのだから、どうしてそれが途中で絶えたりしようか。）

○ 「安蘇の真麻群」の歌

「真麻」の「ま」は美称の接頭語。「そ」は麻で、複合語の中にだけ現れ、単独では用いられない。「上毛野安蘇の真麻群」までは「かき抱き」を導くための序。麻は細長く伸びて三メートル以上にも達するため、倒れないように密植する。その密生した麻を収穫する時、抱きかかえて根こそぎ引き抜くことから、「かき抱き」を導くとされる。「かき抱き」を言うための序詞として麻の束をもってきたところは生活と密着している。序と取らなければ別解のような解釈になる。

麻は東歌で最も多数うたわれている植物である。近代まで広く栽培されていたが、化学繊維の普及に伴い、衰退した。今日、群馬県内では、「岩島麻」の産地である東吾妻町三島が唯一の栽培地として残るのみとなった。東歌では、麻の他に、柳、稲、菅、おけら、松など、生活に身近な植物が多くよまれている。一方、万葉集全体で多くよまれている植物は、萩、梅、橘、菅、松、葦、茅、柳、藤、桜などであり、東歌の様相はそれとはだいぶ相違している。

「あど」は「何」と同じ。万葉集では東歌にのみ七例見える。そのうちの三例を示す。

- ①上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）上野
②高麗錦紐解き放けて寝るが上に何どせろとかもあやに愛しき（三四六五）不明
（紐を解き放って共寝をしているのに、この上一体どうしろというのか、なんともいとしきことよ）
③子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四）不明
（子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしていたいと私は思う。あなたは どう思う？）

○「阿蘇山葛」の歌

「つづら」はつる草。つる草は地を這いつつ延びてゆく。「あぜ」は「何故」と同じ。万葉集では東歌にのみ八例見える。「絶えせ」はサ変動詞「絶えず」（「絶ゆ」の名詞形「絶え」にサ変動詞「す」が複合したもの）の未然形。「どうして絶えようか、絶えはしない」。

この歌は譬喩歌の部に収められている。表面的にはつる草のことしかうたっていないが、つる草はあくまでも比喩であって、歌の趣旨は、二人の仲が絶えないようにということであり、男女いずれの歌とも解しうる。内容も、誓約とも、決意とも、願望ともとれる。

◎古注釈における「安蘇」についての記述

- ①八雲御抄勅撰名所集にも上野の名所とみゆ。（北村季吟『万葉集拾穂抄』）1686
②下野ニハ安蘇郡アレド、上野ニハ何レノ郡ニ安蘇ト云所ノ有ニカ。和名集ニハ見えス。（契沖『万葉代匠記』精撰本）1690

③下野にある郡の名也。古は上野に属せしか。又上野にも郷の内にある歟。何れにまれあそは地名也。同じ地名なれ共まそと云ふ言を求めん為のあそ也。又あそと云ふ詞はあさと云詞なれば、是等の意をこめて読めるなるべし。

（荷田春満『万葉集童蒙抄』）1733頃

④下野国、安蘇郡、あそ山、あその川原、あそ村などよめり。上野国には、きこえず、誤しもの也。……（頭注 上毛下毛元来一国なれば混してよみしなるべし）

（高井宣風『万葉集残考』）1816

⑤（頭注 下野安蘇郡、もとはこの上野にもわたれる地には非るか。）

（鹿持雅澄『万葉集古義』）1842

⑥安蘇は今甘楽郡に宇田村と云在、其村に小山あり、今峰山と云【稻荷を祭て今寺有】其山を往古より安蘇岡山と云ひ来れるを、今朝岡と書くと鈴木千本云り、然らは宇田の宇も苧の移りたるにて、今も甘楽郡は、苧を多く作り、上野麻とて、いと名高く殊に此宇田の辺り多しといへば安蘇は此辺りと定むべし【但し下に安蘇山つづらとよめる安蘇は箕輪のほとりをいふといへば別か】

（橋本直香『上野歌解』）1865頃

⑦安蘇山は里人云、今の相馬嶽の事にて【安曾と相馬と音ちかし】其辺りより箕輪のわたりをかけて安蘇の荘と云ふとぞ、……箕輪軍記に北は安曾山相馬の麓と有るは其名の二つに成しにてすべて此ほとりを安曾と云しと見えたり、

（橋本直香『上野歌解』）1865頃

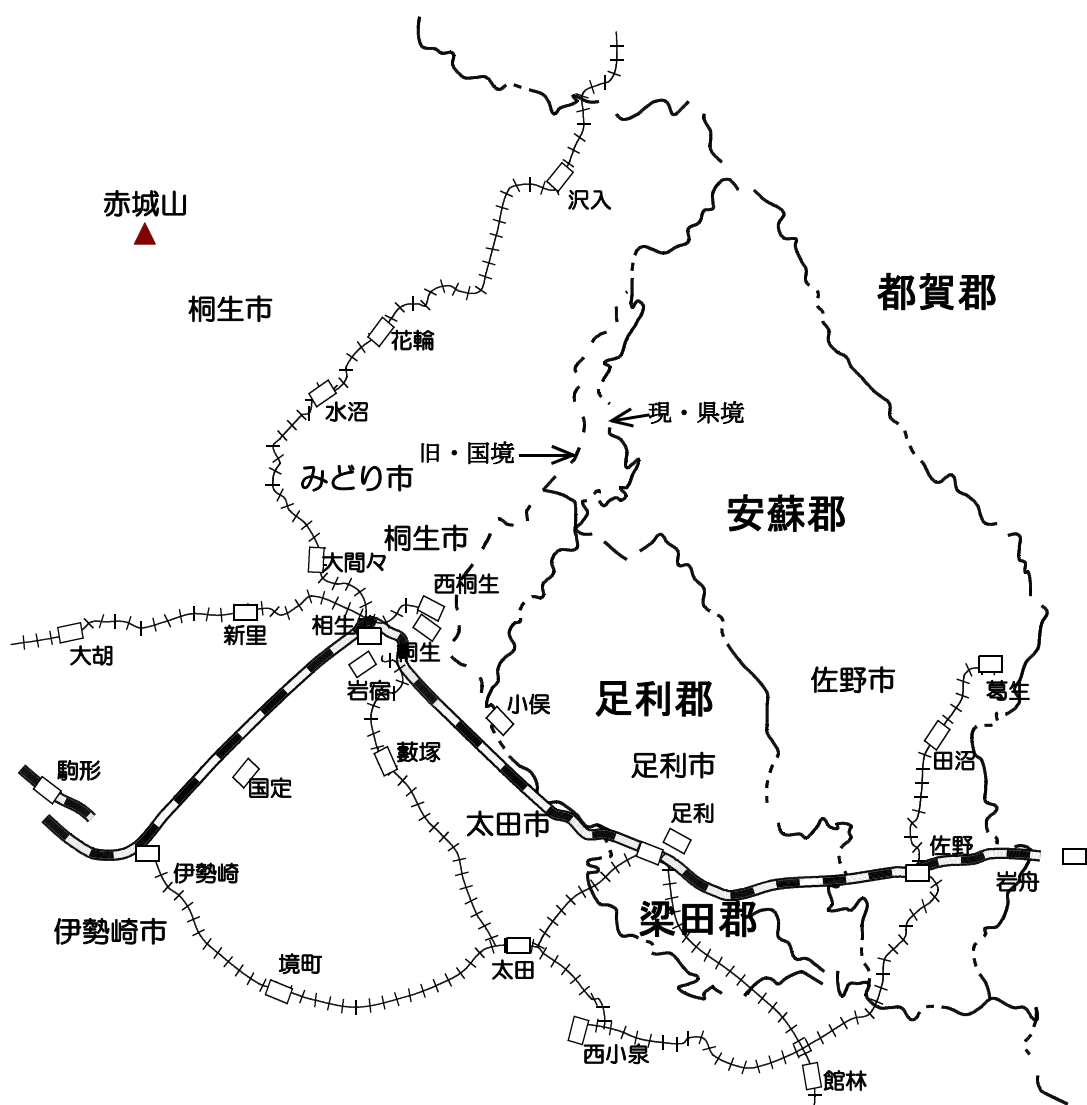
《参考》

下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ（三四二五）下野国東歌
（下毛野の安蘇の河原を、石を踏まずに宙を飛ぶような気持ちでやってきた。だからあなたも本当の気持ちを言ってみよう。）

上野国の安蘇も下野国の安蘇と関連づける考え方が多い。かつて安蘇の地は上野・下野両国にまたがるような広大な地域であったか、あるいは、上野・下野の国境線が移動することがあり、それに伴って安蘇の地が上野国に所属していた時期と下野国に所属していた時期とがあったと考えるのである。

現在、富岡市の貫前神社の北方、直線距離にして五〇〇メートルあまりのところに阿曾岡公園があり、そこに昭和十一年（一九三六）に建てられた「安蘇の真麻群」の

万葉歌碑がある。



さて、「上毛野安蘇」はいずれの地であろうか。桐生市の方は、下野国安蘇郡が古代から存在した郡名であることは確かだが、安蘇と呼ばれる地域が上野国の方にも広がっていたとか、安蘇の地の所属が上野・下野両国間で変動していたとかいうことは推測に過ぎず、確証はない。一方、富岡市の方は、安蘇岡山という地名がいつ頃まで遡れるものか手掛かりがない。結局、現在のところ未詳とする他はない。

ただ、地名「あそ」は「あさ」に由来する可能性がある。「安蘇の真麻群」と言ったとき、「(麻の産地である) 安蘇の、その麻の束」という意味の連関が推測される。『万葉集童蒙抄』に、「あそは地名也。同じ地名なれ共、まそと云ふ言を求めん為にあそ也。又あそと云ふ詞はあさと云詞なれば、是等の意をこめて読めるなるべし。」とあるのは首肯できる。

【多胡】

吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも(三四〇三) 上野国東歌
(私の恋は今も切ない。そして(多胡の入野の奥ではないが)将来も切ないことだ。)

多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに(三四一一)
上野国東歌

(多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張って言ひ寄ってみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。(ちつとも靡かないでさ。))いくら顔が美しいからって。)

○「多胡の入野」の歌

「まさか」の「ま」は目、「さ」は方向、「か」は所の意で、「まさか」は、「まさここに」「さしあたつての今」「現在」。万葉集に「さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ(さ百合花の名のように後(ゆり)にもまた逢おうと思うからこそ、今の今もあなたと親しくお付き合いしている)」(巻一八・四〇八八。大伴家持)という例があり、この例では「後」と「今のまさか」とが対比されている。

「入野」は山地に奥深く入り込んだ野。「いり」は「入江」や「入り海」の「いり」に同じ。地形図を見ると、高崎市吉井町多比良、神保、塩あたりに南方の山地に向かって低地が細長く延びているような場所がいくつかある。そういう地を「入野」と呼んだのであろうか。

かつて多胡の地に入野村があった。この村は昭和三〇年の町村合併で吉井町の一部となり、村名は消滅したが、今も入野中学校、入野小学校などに「入野」という名を留めている。しかし、この地名は、明治二二年に小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して新しい村ができたときに、万葉集東歌の「多胡の入野」が黒熊のあたりに比定されるという説を採用して新村名としたものである。この村名を根拠に東歌の「入野」を地名と考えたり、その具体的な位置を想定したりしては話が逆になる。

「多胡の入野の」は「おく」を導くための序。「おく」という語には、空間的な「奥」という意味と、時間的な「将来」という意味とがあり、この歌ではそれを懸けている。万葉集に、「おく」を「将来」の意味で用いた例はあまり多くなく、四例に留まるが、そのうちの三例までが東歌の例である(残る一例は大伴坂上郎女の歌)。中でも、上野国東歌の

伊香保の岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し良かば(三四一〇)

(伊香保の峰の急斜面に広がる榛の木の間では、地中で根が絡み合って凝り固まっている、そのネモコロではないが)ネモコロに(こまごまと)将来のことを心配することはない。今さえ幸せならば)

という歌では、「将来」と「現在」とが対比されている点で、今扱っている歌と共通している。

「かなし」は、どうしようもないほどの痛切な感情を表す語。

①「とても悲しい」「つらく切ない」という意味と、

②「切ないほどにいとしい」「かわいくてたまらない」という意味とがある。

神さぶる磐根いはねごごしきみ吉野の水分山みくまりやまを見ればかなしも（巻七・一一三〇）

（神々しい岩がごつごつした吉野の水分山を見ると、何とも言えないほどの強い感動を覚える）

という例は、①の「悲しい」「つらい」でもなく、②の「いとしい」「かわいい」でもない。まさに「どうしようもないほどの痛切な感情」の意味で用いられている。

万葉集に「かなし」はちょうど一〇〇例ある。そのうち、今示したような①でも②でもない例は三例ある。「多胡の入野」の歌に二例用いられている「かなし」もひとまず除外すると、残りは九五例。それらを、東国の歌（東歌・防人歌）とその他の歌（あらかたは畿内の人々の作と考えられる）とに分けて、その用法を示せば次の通りである。

a 東国の歌……①の意味 三例（八％）、②の意味三五例（九二％）

b その他の歌……①の意味五二例（九一％）、②の意味 五例（九％）

東国の歌とその他の歌との間にはこれだけ顕著な違いがある。「かなし」の意味用法には地域差が厳然として存在する。

なお、東国の歌の中で①「悲しい」「つらい」の意味で用いられている三首はいずれも防人歌である。東歌に限定すれば、東歌では「かなし」を①「悲しい」「つらい」の意で用いた例は見当たらない。そういう点で、「多胡の入野」の歌は極めて例外的な存在ということになる。

そこで、この歌の初句の「恋」を「恋人」の意味にとつて、「私の恋人は今も愛しい。そしてこの先もずっと愛しいことだろう」と解する説がある。こう考えれば、この歌の「かなし」の意味は東歌の例に叶うが、万葉集には「恋」という語を「恋人」の意に用いた例はない。ひよっとしたら、この歌の作者は東国人ではなく、都から下ってきた官人かもしれない。そういう目で見ると、この歌には東国方言とおぼしき語は含まれていないし、歌も非常に技巧的である。可能性は高いのではあるまいか。

「草枕」は、通常は「旅」に掛かる枕詞。万葉集に四九例あるうち、四八例が「旅」に掛かっており、残る一例が「多胡」に掛かるこの歌の例である。なぜ「多胡」に掛かるのか分からない。当時、「草枕」とくれば誰もが「旅」を連想したのであろうから、あるいは、この歌の作者は、この枕詞を用いることで、自分がこれから旅に出ることを暗示しようとしたのかもしれない。

○「多胡の嶺に」の歌

「多胡の嶺」は多胡郡にある山。具体的にどの山を指すか明らかではないが、牛伏山の可能性が高いか。綱で土地を引き寄せるという話は『出雲国風土記』の国引き神話を連想させる。上代では普通の発想であつたのだろうか。

「あにくやしづし」は未詳。今は仮に「あ、憎や沈石」の意に解した。「沈石」は水底に沈んでいる石。他に「あに来や静し」（どうして寄つてこようか、平然として）とする説もある。ただ、「静し」という形容詞はない。

《参考》

① 弁官符上野国片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

弁官の符に、「上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡、并せて三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す」とあり。和銅四年三月九日甲寅の宣なり。左中弁は正五位下多治比真人、太政官は二品穗積親王、左大臣は正二位石上尊、右大臣は正二位藤原尊なり。

② 上野国甘良郡の織裳・韓級・矢田・大家、緑野郡の武美、片岡郡の山等の六郷を割きて、別に多胡郡を置く。（『続日本紀』和銅四年三月六日条）

＊和銅四年（七一）三月、上野国甘良郡から織裳里・韓級里・矢田里・大家里の四里（当時、「郡」の下 of 行政単位名は「郷」ではなく「里」であつた。続日本紀に「郷」とあるのは、後世の名称を反映させたもので、和銅四年当時の名称ではない）、緑野郡から武美里、片岡郡から山里の計六里、三百戸を分割して、新たに多胡郡を設置した。